

2013年5月17日(金)日経ホール・18日(土)東大和市民会館ハミングホール

「全ロシア音楽コンクール 優勝者ガラ・コンサート」

解説 石田一志

《ピアノ》

スクリャービン:ピアノ・ソナタ第5番 作品 53

アレクサンドル・スクリャービン(1872～1915)が、神智学をテーマにした最初の作品は交響曲第4番《法悦の詩》(1905～07)であるが、それにすぐ続くのがこのソナタ。彼のピアノ・ソナタは10曲を数えるが、この第5番からが後期の作品の特徴である単一楽章構成になっている。序奏部で提示される2種の楽想と、ソナタ形式の主部で提示される3つの主題が、渾然一体となる展開部は法悦の境地。

ラフマニノフ:楽興の時 作品 16 第1番 変ロ短調「アンダンティーノ」

セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)はモスクワ音楽院卒業作品の歌劇《アレコ》が金メダル大賞を獲得し、すぐにボリショイ劇場で初演されるなど、順風満帆の作曲家としてのデビューをしたが、1897年の第1交響曲(1895)の初演の失敗で大きな精神的打撃を受けた。その前年の96年に作曲された《楽興の時》は初期の最後に当たる。6曲からなるが、この第1番は悲歌風の性格をもっている。3連音の伴奏にのって哀調を帯びた主題が歌われる。

ラフマニノフ:エチュード 作品39 第1番

作品39は1916年10月から翌年2月の間に書き上げられた9曲からなる。17年2月にラフマニノフ自身によって初演されたが、これが亡命前のロシア時代の最後の作品となった。第1番はアレグロ・アジタート。ハ短調で速いパッセージが行き交う劇的な激しい曲。

《ヴァイオリン》

アルヴォ・ペルト:ヴァイオリンとピアノのための《フラトレス》

エストニア出身のアルヴォ・ペルト(1935～)は80年代に国際的な地位を獲得した作曲家。彼の音楽は簡素なテクスチャと構築性の作風にも関わらずに深い精神性を伝える。《フラトレス》とは「信仰を共にする仲間」の意味。古楽器アンサンブルのために1977年に作曲されたが、これはクレーメル委嘱による80年版。低音の空虚5度の上で、主題が反復の度に静かな変化と進化を遂げていく。

チャイコフスキー:「ワルツ・スケルツォ」作品 34

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～1893)はヴァイオリンのための作品4作残したが、いずれも1875年から78年の比較的短い期間に書き上げられている。不幸に終わった結婚の前後のことである。77年初めに作曲された「ワルツ・スケルツォ」は結婚生活最初の高揚感を反映して楽しげで、部分的には奔放な性格をもっている。

チャイコフスキー 「なつかしい土地の思い出」作品 42 より 「瞑想曲(Meditation)」

1878年3月にチャイコフスキーはヴァイオリン協奏曲を作曲したが、この「瞑想曲」は本来、そのアンダンテ楽章として着想されたもの。「なつかしい土地」とは協奏曲を作曲したスイスのクラランスを指している。ピアノの導入に続いてニ短調によるヴァイオリンの歌が始まる。間奏には技巧的な部分がある。

## 《チェロ》

ガスパール・カサド:無伴奏チェロのための組曲

ガスパール・カサド(1897~1966)は9歳のときカザルスに見出され、バルセロナ音楽院とパリで彼の指導を受けた。父が作曲家であったことから、作曲にも意欲を見せた。J.S.バッハの組曲を念頭に置いた構成のなかに、叙情味たっぷりの歌と躍動するカタロニアのリズムが織り込まれている。「プレリュード-ファンタジア」「サルダーナ(舞踏)」「インテルメッツォとダンス・フィナーレ」の3楽章からなる。

ラフマニノフ:チェロとピアノのためのソナタ ト短調作品 19 より「アンダンテ」

ラフマニノフがモスクワ音楽院出身の先輩チェロ奏者アナトーリ・ブランドゥコフ(1859~1930)のために1901年に作曲し、初演を共にした彼の唯一のチェロ曲。全4楽章からなるが、この第3楽章アンダンテは、優雅なリリズムで親しまれている。3部形式で主部は変ホ長調、中間部で短調に変わり憂愁の陰りを示す。

ロストロポーヴィチ:ユモレスク

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ(1927~2007)はチェリスト、指揮者として活躍したが、モスクワ音楽院ではチェロをセミヨーン・コゾルーポフに師事したほか、ショスタコーヴィチとシェバーリンのもとで作曲と管弦楽法も学んだ。この小品は、師のコゾルーポフの誕生日に贈った作品で、レッスンで与えられた課題が音楽的に展開された超絶技巧の曲になっている。

## 《声楽》

ヴェルディ:オペラ「椿姫」より ああ そはかの人か 花から花へ(E strano)

「椿姫」(1837)はパリの社交界の花形ヴィオレッタの悲劇的な生涯を甘美な音楽が彩っていくジョゼッペ・ヴェルディ(1813~1901)の傑作。これは第1幕でのヴィオレッタのアリア。彼女は思いがけず恋の気分に浸っている自分に驚き、それは初めてあったアルフレードのためと気づく。しかしやがて自分の乱れた生活を思い出すにつれ、次第に自嘲的な表情を強めていく。

ベッリーニ:オペラ「夢遊病の女」より ああ 信じられないわ(Ah, non credia)

ヴィンチェンツォ・ベッリーニ(1801~1855)の代表作「夢遊病の女」(1831)は、19世紀初頭のスイスが舞台。村一番の娘アミーナは、相思相愛の仲の若い地主のエルヴィーノの婚約式の日持病の夢遊病のために貞操を疑われる事件を起こすが、最後に疑いが晴れる。これはアミーナが、恋人を失う嘆きを歌う第2幕のアリア。

プッチーニ:オペラ「つばめ」より ドレッタの美しい夢(Chi il bel sogno)

ジャコモ・プッチーニ(1858~1924)の「つばめ」(1917)は、パリの銀行家の囲われ者として裕福な生活を送るマグダが、純朴な青年ルッジェーロとの恋に落ちる物語。このアリアは、第1幕で、詩人ブリュニエが始めた即興詩を完成させる形でマグダによって歌われる。広い音域をもつ美しいアリア。